

「高校生のための学びの基礎診断」とは何か



斎藤剛史

文部科学省が高大接続改革のために導入する新テストは2種類がある。一つは、周知のように大学入試センター試験に代わって2020年度から(2021年1月実施)導入される「大学入学共通テスト」(共通テスト)。もう一つは「高校生のための学びの基礎診断」(基礎診断)だが、2019年度から実施されるにもかかわらず、高校現場でもほとんど認知が進んでいないのが実情だ。いったい、「基礎診断」とはどんなものなのだろうか。

■ 二転三転した基礎診断の性格

もともと基礎診断は、高校無償化を導入した旧民主党政権時代に、全国学力テストの高校版である「高等学校学習到達度テスト(仮称)」として構想された。その狙いは、高校教育の多様化が進む中で、高校教育ですべての生徒が身に付けるべき資質・能力の「コア」となる学力を保証しようというものだった。

その後、自民党の政権復帰、安倍政権による教育再生実行会議の設置により、学習到達度テストの構想は、大学入試改革の一環として議論されるようになる。同実行会議の第4次提言(2013年10月)は、共通テストに当たる「達成度テスト(発展レベル)」とともに、「達成度テスト(基礎レベル)」の導入を提言。発展レベルは一般入試、基礎レベルは推薦・AO入試などでの活用が想定されていた。

ところが、提言の具体化を検討した文科省の高大接続システム改革会議は、「達成度テスト(基礎レベル)」の名称を「高等学校基礎学力テスト

(仮称)」に変更して、希望する高校のみの受検という方針を打ち出した。そして、入試選抜などに関わる「テスト」ではなく、基礎学力の定着を図る授業改善のPDCAサイクルを確立するツールであることを明確にするため、最終的に「高校生のための学びのための基礎診断」が正式名称となり、文科省は2017年7月に実施方針を策定した。

■ 民間試験を活用して4技能を測定

基礎診断は、国語、数学、英語の3教科で、文科省が認定した民間事業者による複数の試験を活用して実施する。記述式など思考力を測定する問題を導入すること、英語では「話す」を含む4技能を測定することなどが認定基準となっている。基礎診断を実施するかも含めて、どの民間試験を利用するか、実施時期、実施回数、対象学年などは、高校などの判断に任される。また文科省は、平均点、順位などの情報は公開しない。

文科省は、2018年12月に基礎診断として活用する民間試験の認定状況を公開した。初年度分としては、国・数・英の3教科セットがベネッセコーポレーションなど3団体8試験、教科単独の英語はケンブリッジ大学英語検定機構のケンブリッジ英語検定、ベネッセコーポレーションのGTEC、Z会ソリューションの英語CAN-DOテストなど5団体7試験が認定されている。

英語については、大学入試とともに、基礎学力診断でも4技能が測定されることになり、高校の英語教育にも大きな影響を与えそうだ。

(さいとう たけふみ・教育ジャーナリスト)